

# 同志社大学

## 2014年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2015年 3月 10日提出

所 属	職 名	氏 名
高等研究教育機構 ／文学部	助手(有期研究員)	宇多 瞳
研 究 題 目	「フランスにおけるリリズム〔lyrisme〕概念の変容と近現代芸術論」	
研 究 成 果 の 概 要	<p>2014年度前半は、昨年度末に提出した博士論文「ブルトンの芸術論とルヴェルディのリリズム概念」の第7章をまとめ直し、「『リリズム〔lyrisme〕』概念の変容とその意義—1910-20年代の芸術諸理論において」として、雑誌『美学』に投稿した。この論文では、二〇世紀初頭における「リリズム」概念と「リリック的主体」の変容を明らかにすることを目指した。</p> <p>「リリズム〔lyrisme〕」概念は一九世紀に生じた語であり、辞書によれば抒情詩における愛・自然・宗教・死などの主題についての「詩人の個人的感情の表出〔l' expression de sentiments personnels du poète〕」を意味すると通常は説明されている。この語は芸術家の精神的な高揚状態と結び付けられ、感情の過剰さを示すとしてしばしば消極的に捉えられて来た。しかしながら、「リリズム」（あるいは「抒情」）がどのようなものなのか、またいかにして生じるのかを明らかにしようと試みる考察は、限られた例外を除いてこれまでほとんど行われていない。</p> <p>「リリズム」をいかに定義するか——この問いをめぐって、二〇世紀の最初の三年間にピエール・ルヴェルディ（Pierre Reverdy, 1889-1960）をはじめとする詩人や批評家たちによって多くの議論が行われている。彼らは、「リリズム」をたんなる感情吐露や熱狂状態に還元しようとする常識的な見方から基本的には距離を置きながら、それがいかなるものと考えられるのか、それぞれの見解を明らかにしている。こうした時期の諸考察については、シュルレアリスム絵画理論の成立期における「リリズム」概念の重要性を指摘し、そこから当時のアヴァンギャルド芸術運動を横断的に論じたキム・グラントによる研究がある。しかしながら彼女の研究では、アヴァンギャルドにおいてなぜ「リリズム」が感情吐露や熱狂状態ではないと考えられるに至ったのか、その理由や背景が明確には示されていない。</p> <p>他方、ジャン＝ミシェル・モルポワは『リリズムについて』（パリ、ジョゼ・</p>	

コルティ書店、2000年、Jean-Michel Maulpoix, *Du lyrisme*, Paris, José Corti, 2000) において、「リリスム」が一九世紀の最初の四半世紀に新語として生じ、フランス・ロマン主義の思潮のなかで確立されるが、その後、ロマン主義の衰退とともに変容した概念であると指摘している。また、彼を含めた研究者たちはこの考察に関連して近年、「リリック的主体〔sujet lyrique〕」の概念についても考察しており、これも注目に値する。

モルポワはロマン主義における「リリスム」の近代性を指摘し、さらにボードレールにおける「リリック的主体」の姿の変容を論じることによって「リリスム」概念の持つ意義を再検討している。このモルポワの研究を踏まえながら、この論文ではルヴェルディ、ブルトン、デルメ、ル・コルビュジエによって「リリスム」がどのように考えられていたのかを考察した。その結果、二〇世紀初頭の芸術家たちによって、「リリスム」は「リリック的主体」による新たな表現の可能性の探究として再定義されていることが明らかとなった。具体的には、ルヴェルディは精神の高揚状態や感情の発露という「リリスム」の性質を認めることを拒否する。また、ブルトンは「リリスム」における主体の非能動性を強調する。それに対して、デルメは「リリスム」を潜在意識における情動の働きであるとし、さらにル・コルビュジエは技術の基盤の上に「リリスム」を置き、芸術家の創造性と気高さを称賛しているのである。

上記の論文は、査読を経た後に『美學』第65号(2巻)、pp.13-24(2014年12月31日発行)に掲載された。査読者からは、本稿が「リリスム」という概念の不確定性を明らかにし、概念の変遷のなかで「リリスム」はなお今日的価値を持ち得る概念であるという見解を、歴史的記述の分析を踏まえて論述している。辞書に記載されている一般的な理解を超えて、ひとつの概念の持ちうる意味の多層性を見いだそうとしたところは新しい試みと言える。モルポワなどの先行研究を踏まえて多くの文献に基づいた歴史的な研究がなされ、その学問的意義は少なくない等、一定の評価を得た。

また、この研究に関連して、人文科学研究所第11研究会5月例会(2014年5月24日於同志社大学)で「〈リリスム〉の生成とフランス・ロマン主義」と題する研究報告を行った。この発表では、モルポワの『リリスムについて』を精読したノートをもとに、どのような文化的背景の中から「リリスム」概念が生じたと考えられているのか、モルポワの研究の射程とその限界を明らかにしようと試みた。

モルポワの研究は、「リリスム」概念に対する従来のロマン主義的理解の不十分さを指摘した上で、「リリスム」によって織り成されてきたフランス近現代文学の諸相を描き出している点で評価される。筆者の研究もまた、これまではモルポワの路線を踏襲してきた。しかしながら、現在の「リリスム」研究では研究対象が仏文学の領域に限定され、日本はもとより英米独伊の文学・芸術への関心がほとんど見られない。また、哲学あるいは美学理論においてこの概念がどのように扱われているかといった考察も十分に行われていない。報告者はこれらを今後の課題と考えており、この問題に取り組むべく現在は来年度に向けて次の研究論文を準備している所である。